



 Data	2022-40
監督・脚本: ジュリア・デュクルノ	
—	
出演: ヴァンサン・ランドン/アガト・ルセル/ギャランス・マリリエ/ライ・サラメ	

みどころ

チタン (合金) はお馴染みの言葉、概念だが、なぜそれがタイトルに?それは、本作が頭蓋骨にチタンプレートを埋め込むシーンで始まるから。いや、そんな安易な発想なら、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を獲得できるはずはない。

「映画の“既成概念”もあなたの“価値観”もすべて砕かれた先にあるまさかの【感動】に各界驚嘆! 混乱! の声続出!!」、そんな謳い文句通り、カーセックス、妊娠、ボディ・ホラー、そして出産と続く本作はまさに怪作だ。

他方、塚本晋也監督の『鉄男 THE BULLET MAN』(09年)のテーマは“怒り”だったが、本作のそれは、愛の誕生の物語! それってホント?

「百聞は一見に如かず」のことわざ通り、いかに気味悪くとも(?), 本作はあなた自身の目でじっくりと!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■アカデミー賞 VS カンヌ。その評価は大違い! ■□■

本作は2021年の第74回カンヌ国際映画祭で最高賞のパルムドール賞を受賞したものの、良い映画とは何か?それを巡っては、アメリカの価値観と西欧諸国のそれには大きな違いがある。そのため、カンヌ、ヴェネチア、ベルリンという三大国際映画祭の評価とアメリカのアカデミー賞の評価は大きく違い、受賞作にも大きな違いがある。それを明確にしたのが本作。本作は第74回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞に輝いたが、第94回アカデミー賞には全くノミネートされていない。私は同じ日にこの両者を観比べたから、その違いにビックリ!

もともと、2019年の第72回カンヌ国際映画祭ではポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』(19年) (『シネマ46』14頁) がパルムドール賞を受賞し、同時に

同年の第92回アカデミー賞でも作品賞、監督賞、脚本賞、国際長編映画賞の計4部門を受賞した。しかし、これは例外だ。

本作のチラシには、「映画史を破壊し、新時代を告げる圧倒的【怪作】ついに解禁。」「世界が驚愕、混乱、困惑 カンヌ史上最も奇天烈にして、最高賞パルムドール受賞！」と書かれている。これは一体ナニ？

■□■タイトルの意味は？この女性監督に注目！■□■

フランス生まれの若手女性監督ジュリア・デュクルノーは、デビュー作『RAW 少女のめざめ』（16年）で注目されたそうだが、私は全く知らなかった人だ。本作のパンフレットには、ジュリア・デュクルノー監督の「Director Interview」があるので、これは必読！そこでは、冒頭に「厳密に言えば、＜愛の誕生＞の物語です」と語られているが、その内容は超難解！さらに、脳にチタンを埋め込まれた少女アレクシアを大人として登場させる一連のシーンについての説明も超難解だ。

去る4月11日に投開票されたフランスの大統領選挙の結果は、中道で現職大統領のエマニュエル・マクロンが27.84%、極右「国民連合」のマリーヌ・ルペンが23.15%、急進左派のジャンリュック・メランションが21.95%、とほぼ三分されたため、4月24日に決選投票が行われることになった。アメリカでも日本でも二極化が顕著だが、フランスは三極分化になっているところがすごい。「さすが革命の国フランス！」と感心させられるが、そんなフランスの傾向がそっくりそのまま、本作の脚本を書き監督したジュリア・デュクルノー監督の頭の中に・・・？

昨年アカデミー賞監督賞は、『ノマドランド』（20年）を監督した北京生まれの女性クロエ・ジャオに注目が集まったが、昨年のカンヌは本作の女性監督ジュリア・デュクルノーに注目！

■□■交通事故！チタン！カーセックス！こりゃまさに怪作！■□■

日本映画初のアカデミー賞国際長編映画賞を受賞した濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』（21年）は、全編、赤色の車サブが大活躍したが、緑内障の主人公に代わって同車を運転した専属ドライバーの運転は終始慎重だった。本作はそれとは大違いで、冒頭に見る激しい交通事故はハチャメチャ。そして、この交通事故によって子供のアレクシアは、頭蓋骨にチタンプレートを埋め込まれることに。それは不幸な出来事だが、彼女はそれ以来、車に対して異常な執着心を抱いたというからビックリ！そりゃ一体ナニ？

他方、世界各地のモーターショーでは、魅力的な車のそばに魅力的な女性がついているのが常。これが女性の性への冒涇として非難の対象にされないのは不思議だが、本作では、美しく成長したアレクシア（アガト・ルセル）が魅力的な新車のそばで魅力的な肢体をくねらせているからビックリ！これは一体ナニ？そして、彼女の車への異常な執念は、ついに車とのSEXで快感に浸り、妊娠までしてしまうというから、さらにビックリ！男なら誰でもそんな魅力的な女に目を向けるのは当然だが、そんな男に対するアレクシアの反撃は

想像を絶する過剰なものだから、これにもビックリ！こりゃ、まさに怪作！

■□■テーマは怒り！ボディ・ホラーとは？『鉄男』を彷彿！■□■

各界の著名人の本作への称賛の言葉をまとめた別のチラシには、「映画の“既成概念”もあなたの“価値観”もすべて砕かれた先にあるまさかの【感動】に各界驚嘆！混乱！の声続出！！」とある。そんな本作を、私のつたない言語力や文章力で評論するのが難しいのは当然。他方、本作のパンフレットには、小林真里氏（映画評論家／映画監督）の Keywords があり、そこでは、①トランスフォーメーション、②ボディ・ホラー、③デヴィッド・クローネンバーグ、④女性シリアルキラー、⑤デビュー作『RAW〜』との繋がり、⑥肉体が示すもの、⑦愛についての物語、の解説がある。本作は、ボディ・ホラーの巨匠デヴィッド・クローネンバーグ監督と彼の自動車事故へのフェティシズムを題材にした『クラッシュ』（96年）から影響を受けたそうだが、私は同作を観ていないし、同監督のそんな特性も知らない。

私が本作を見て思い出したのは、塚本晋也監督の『鉄男 THE BULLET MAN』（09年）（『シネマ25』179頁）。同作の評論で私は、「変身は自律的？それとも他律的？鉄男の場合は？」「映像と音楽に注目！」「テーマは『怒り』VS『制御』、『憎しみ』VS『愛』」「なぜ舞台を東京に？なぜ『英語劇』に？」「“ヤツ”との『対決』は？怒りの行く末は？」「究極の暴力は戦争、しかし『無意識の暴力』とは？」との小見出しで、詳しく私の問題意識を解説した。人間の身体が鉄になる？そんなバカな！誰でもそう思うはずだが、そんなテーマに20年間も真面目に取り組んできた塚本晋也監督が同作にぶつけた問題意識とは？そんな目で、本作を観ると・・・。

■□■もう一人の主人公ヴァンサンにも注目！この男もヘン？■□■

私は本作の脚本を書き、監督した女性ジュリア・デュクルノーの頭の中がどうなっているのかサッパリわからないが、本作のもう一人の主人公になるヴァンサン（ヴァンサン・ランドン）にも注目！この初老の男は消防団の団長で、小世帯ながら自分の団の結束は団員が自分の命令に無条件に従うことによって成り立っていると信じている、ロシアのプーチン大統領のような男。ある日、アレクシアに出会った彼は、なぜか彼女を行方不明になっている自分の息子だと信じ込み、以降、“父と息子”としての奇妙な共同生活が始まっていくからそれに注目！アレクシアを演ずるアガト・ルセルは、新車の側で美しい肢体をくねらせて踊る美しい女性だから、なぜそんなストーリー展開になっていくのか、私にはさっぱりわからない。さらに、新車とのセックスで妊娠してしまったアレクシアのお腹が大きくなっていくのが本作では不気味だが、それでもヴァンサンは彼女を自分の息子と信じ続けているから、アレレ。一体どうなってるの？

他方、「俺はマッチョだ！」と信じ込んでいるヴァンサンは、体力維持とそのアップに懸命だが、寄る年波には勝てないようで、筋肉増強剤を毎日お尻に注射しているらしい。車とたわむれる美女の肢体は奇妙でもそれなりに美しいが、初老の男ヴァンサンのそんな生

態(?)に共感できないのは仕方ない。

本作中盤のそんなストーリー展開は違和感いっぱいだが、同時に迫力もいっぱい。この物語はこれから一体どう進んでいくの？

■□■ “壊して、生まれる。” 本作は、“愛の誕生の物語” ■□■

私はアガト・ルセル演ずるアレクシアが、本作の主演(ヒロイン)だと思っていたが、キャストの順番から見ると、ホントの主演はヴァンサン・ランドン演じるヴァンサンらしい。それは、パンフレットの「監督インタビュー」を読めば明らかだ。なぜなら、ヴァンサンの役はジュリア・デュクルノー監督が「当て書き」したもので、監督とヴァンサン・ランドンはずいぶん前からの知り合いであるのに対し、アガト・ルセルはオーディションで選ばれたヒロインだ。

映画にはさまざまな“出産シーン”が登場する。例えば、章子怡(チャン・ツィイー)が主演した『ジャスミンの花開く(茉莉花開/Jasmine Women)』(04年)(『シネマ17』192頁)では、主人公が雨が降る中、路上で自分一人でお産するシーンが強烈だったが、本作に見るアレクシアのお産シーンは如何に？チラシの謳い文句である“まさかの【感動】”とは一体ナニ？それはよくわからないが、ひょっとして本作のストーリーのテーマが「壊して、生まれる。」とされているところから見ると、このお産シーンがその“まさかの【感動】”！？

ちなみに、パンフレットの「Cast Interview」で、ヴァンサン・ランドンは、「お互いが愛し合うことを強制しているわけではなくて、自由な愛を築きます」と語っているし、アガト・ルセルは、「愛がいかにもパワフルなものかを知ってもらえたら嬉しいです」と語っているから、それもしっかり読み込みたい。また、ジュリア・デュクルノー監督のインタビューでも本作は「厳密に言えば、＜愛の誕生＞の物語です」と語っているから、やっぱり！！

2022(令和4)年4月15日記